



緑爽会報 NO. 107
 '12年 4月25日 発行
 公益社団法人
日本山岳会 緑爽会
 ☎ 03-3261-4433
 事務局 松本恒廣
 樋口公臣 夏原寿一
 近藤 緑 川口章子
 横山 隆 渡部温子

「三月山行」

浅間尾根を歩く

鳥橋 祥子

信州の山以外はあまり登ったことがないので奥多摩の山は魅力があり、山行を楽しみにして参加しました。三月一八日、武蔵五日市駅に八名が集合。予報によると夕方からは雨になりそうなので、なんとか下山までは降らないようにと願うばかりでした。数馬行きのバスに乗り、車窓からの景色を楽しみ、浅間尾根登山口で下車。



前列左から島田・田井・鳥橋・松本 後列瀬戸・川口・戸村の皆さん 撮影・横山隆

嬉しいことに若い戸村さんの参加で平均年齢が大幅に下がり、皆元気をもらいました。バス道を少し戻り、浅間尾根の標識にそって舗装道を登りました。途中の土手には露の臺がでており春を感じました。浅間坂民宿でおいしい水を飲み、杉林の中の急な道をひたすら歩き続けると数馬分岐です。本来なら眺めが開けた所らしいのですが、まわりには雲が低くたれこみ遠くを見ることができません。墨絵の世界に入り込んだようです。素晴らしいのですが少し残念です。浅間尾根は昔から重要な交通路で、馬によって生活物資が運ばれていたようで、昔の人に思いをはせながら歩きました。

途中一本松から少し登った所に標高九三〇メートルの三等三角点があり、そこで三角点や日本水準原点の話を引き勉強になりました。浅間石宮の小さな祠の側に太い枝が直角に曲がっている松があり、自然の造形力に感激しました。のびやかな尾根歩きを楽しみ、人里峠で昼食にしましたが、この頃から心配していた雨が降りはじめました。この状態では展望もきかないので、浅間嶺は通らず休憩所までひと休みし、記念撮影をしました。さすがに休憩所には何組かの人がいましたが、ここに来るまでに会ったのはたったの二人でした。少し前から道がぬかるんでいてひどかったのですが、ますますぬかるみが見えなくなり、靴は泥だらけになってしまいました。峠の茶

屋は営業しておらず、弘沢の滝入口のバス停めざし歩き続けました。道端の可憐な葵スミレが我々を歓迎してくれました。バス停手前の集落にはすばらしい枝垂桜があり、花の時期に訪れたいと思いました。バス停ではタイミングよくバスに乗ることができ、帰路につききました。

墨絵と杉木立とぬかるみ道の静かな楽しい山行でした。

(参加者名は前号に記載)

お花見と懇親会―自然保護委員会と共催で

花に嵐の翌日、四月四日(水)は絶好のお花見日和でした。この日は、自然保護委員会の協力委員と、本年度全国集会に向けて新しく協力申し出のあった方々を交えて、お花見かたがた集まることになっていました。正午、四谷駅に集合したのは、元自然保護委員で緑爽会発足当時のメンバーである澤井政信・篠崎仁・市川義輝さんと、ゲストとして八木原園明(群馬岳連会長)さんや古市進・西谷隆巨(ともに多摩支部自然保護委員)さん、大森弘一郎(山の自然学クラブ代表)さんらが見えて、思いがけず多彩な顔ぶれとなりました。

四谷から市ヶ谷を過ぎる辺りまで土手伝いに五、六分咲きの花を愛で、途中でお弁当と飲み物を調達してルームに着いたのは一時過ぎ。会費千円のささやかな集まりでしたが、自然保護委員会委員と緑爽会有志との交流ができたのはよかったです。自然保護は委員会だけで担うには荷が重く、多くの理解者をもたなくては活動ができません。さらに各支部や関連同好会との「絆」を強めて行かなければと思いつつ散会しました。

参加者二三名 近藤(自然保護委員&緑爽会)記

◆浅間尾根コースタイム

武蔵五日市駅	9:00
浅間尾根登山口	9:50~58
風張峠分岐	11:00
猿石	11:10
一本松	11:28
3等三角点	11:32~40
浅間石宮	11:50
人里峠	12:20~42
浅間嶺休憩所	13:04~15
代官休憩所跡	13:59
時坂峠神社	14:09
弘沢の滝バス停	15:03~20
武蔵五日市駅	15:43



古市・西谷さんを先頭に花の下を歩く、後でカメラを構えるのは沢井さん

撮影・近藤雅幸

一緑爽会総会のご案内一

日時 5月17日(木) 13時~16時
 (昼食の用意はありません)
 場所 日本山岳会会議室
 議題 2011年度事業報告
 決算報告
 2012年度事業計画案
 予算案
 その他
 終了後、富澤克禮会員による映像と講演
 「バイカル湖の旅」を予定しています。



出欠の連絡は松本 ☎ fax03-3326-2892 迄

関東地方南部の山名密集地帯

休憩を設けたのは、後半部分の資料であるプリントを隠しておきたかったからでした。驚くほど多くの山の名をもつ地図がどこで作られていたか場所を秘密にしておきたかったからです。

『鎌倉実測地図』という名の地図は、近代的な手法による地形図として最初の鎌倉地図でした。一八九一年(明治二十四年)、日本の近代登山史の幕開け前に発行された三角測量による地図です。それ以前の鎌倉の地図は、斜め上から、または斜め下から鎌倉を絵で描く形をとって作られていました。三枚目のプリントの真ん中の下にその古い実例の一つである『相模國鎌倉名所及江之嶋全圖』を入れておきました。登ってみたくなるほど堂々とした山々が描かれていました。

当時の鎌倉町は現在の鎌倉市の三分の一ほどの広さ、いいえ狭さでした。二度の町村合併で鎌倉市の現在の範囲ができました。それ以前は、横須賀線の鎌倉駅を中心とする、海と山に囲まれた土地に北鎌倉駅周辺の土地を加えただけの狭い土地でした。

由比ヶ浜に注ぐ滑川(なめりがわ)を中心とする谷間を囲む分水嶺をあらわす線を私がこの実測図に引きました。その分水嶺の上とその内側に記された山の名は合計三十七。番号をつけてみました。虫眼鏡の助けを借りる必要がありますけれど、番号の下の方または上の方をご覧になると山の名を見つけることができます。

三十七でも十分な多さです。現代の私たち、高い山に登ることに慣れた私たちの目には、古都鎌倉を包む風景が山に見えませんが、そ

ここに多くの山があると感じる人たちがいたことをこの地図が証明します。

鎌倉アルプスの出現

一九二七年(昭和二年)に発行された『鎌倉

KAMAKURA』は、タイトルにだけ英語の綴りを誇らしげにかかっています。

この地図をもとにして作ったのが三枚目のプリント右上の概念図です。これが神奈川県

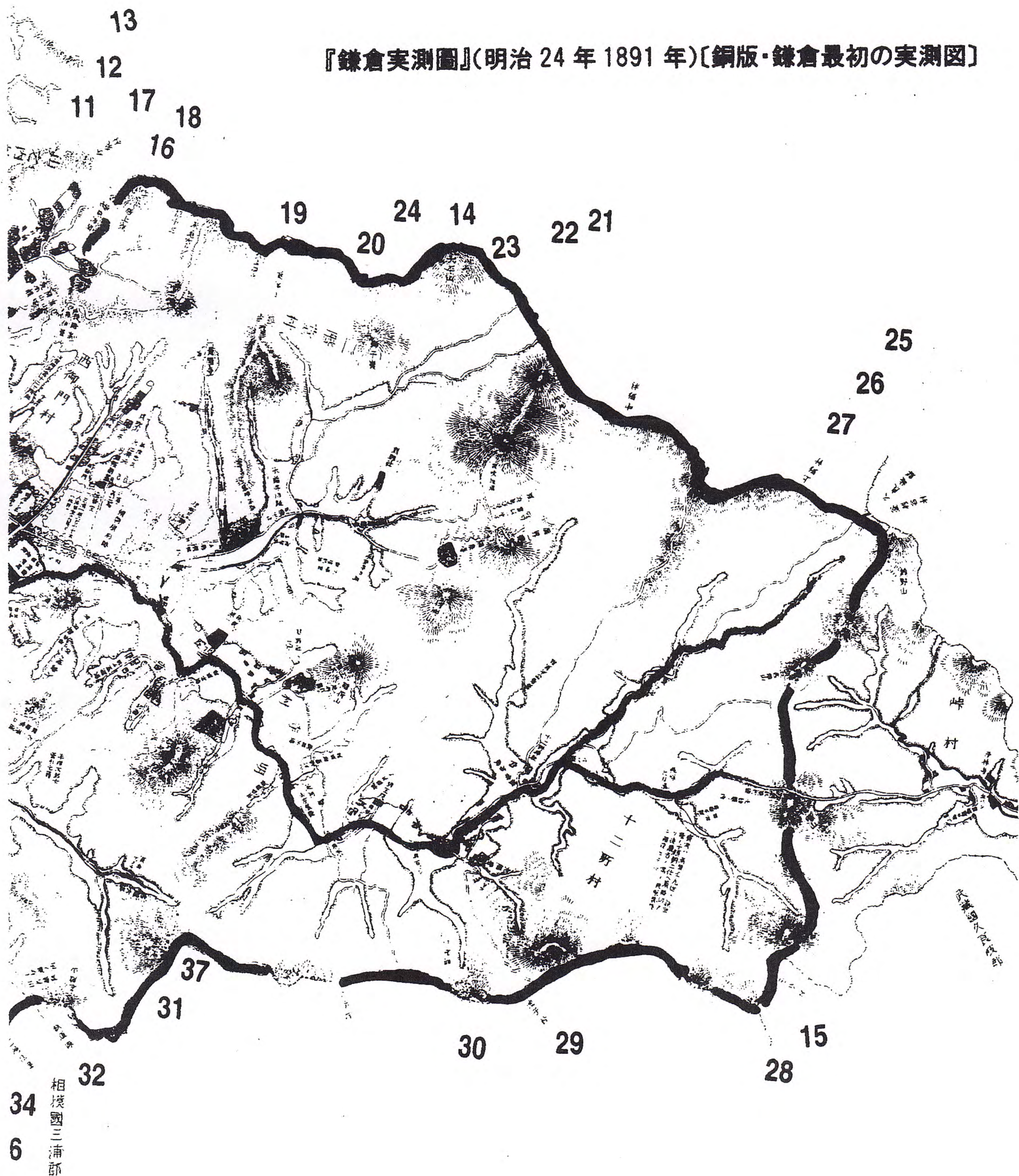
の鎌倉市を流れる滑川の流域にある山たちの

ありかを示すと思う日本山岳会員は一人もいないでしょう。この図のもとになったのは、横須賀鎮守府の認可を受けて発行された公式

の地図でした。

太平洋戦争時代の記憶をおもちの人たちの

『鎌倉実測図』(明治24年1891年)[銅版・鎌倉最初の実測図]



世代にしかおわかりにならないでしょうが、鎌倉の南にある横須賀は、長崎県の佐世保とやらんで日本海軍の最重要拠点でした。東海道線の大船から枝分かれして三浦半島に至る横須賀線は、首都と横須賀の海軍の港を結ぶために作られた路線でした。途中の鎌倉は鎮守府、つまり日本防衛の要の土地を管轄する役所の支配圏内にありました。その鎮守府公認の鎌倉地図に見られる山の名は四十九。

現在の鎌倉市の面積は三十九平方キロメートル。後に加わった二つの地域を除き、その上、古い鎌倉から北部の谷（北鎌倉駅から建長寺を経て鎌倉八幡宮方向に登る坂の最高地点まで）と西部の谷（極楽寺の周辺の谷）を切り落とせば、せいぜい三分の一強ほどの狭さでしかありません。およそ十五平方キロメートルほどにしかならない分水嶺の内側です。そこに四十九の「山」と「峰」が密集していたのです。

「おおよげに出版されて不特定多数の人の目にふれた印刷物」という条件をつけた場合に、これほどの密度で山の名が刷られた例を私は他に知りません。

一九〇二年（明治三十五年）に佐藤善五郎という人の書いた『鎌倉大観』という、鎌倉の地理と歴史と観光名所を詳しく語る鎌倉案内書に添えられた地図でも、同じ地域に十七の山の名が書き込まれていました。日本山岳会誕生の三年前の出版でした。

この『鎌倉大観』はその後も版を重ねられつづけました。一九三〇年（昭和六年）発行の『鎌倉大観』の附録である地図では、山の数が二十五に増えていました。そして、その地図に「鎌倉アルプス越」の文字を見ることので

きます。鎌倉アルプスを横断して鎌倉氏を中心地から横浜方面に向かう道筋をそう呼んだのでした。

◆この「鎌倉アルプス越」のルートについて、



- ①霊山②親不知山③観音山⑤大佛阪山⑥見越嶽⑦長楽寺山⑧佐々目ヶ谷山⑨源氏山⑩鶯谷山⑪嵩山⑫棧路峰⑬大臣山⑭貝吹山⑮勝上嶽⑯泣十王⑰鷲峯山⑱獅子巖⑲大丸山⑳天台山㉑胡桃山㉒稲荷山㉓鈴野山㉔大澤山㉕石名畑山㉖権現山㉗天台山㉘明石山㉙浅間山㉚名越山㉛辨ヶ谷山㉜小富士山㉝屏風山㉞大堂山㉟衣張山 ㊱大平山㊲丸山

大佛次郎編『鎌倉歴史散歩』（一九五七年刊、河出新書）の中に、次のような面白い記述があります。（筆者は安倍正道）。「関所跡の史跡指導標の前を左に入る小路は、旧道で、鎌倉宮の東側に出、永福寺（ようふくじ）址（あと）を通り天

園に達し、「峰の灸」で有名な円海山護念寺に延びている。近年ハイキングコースとしてにぎわうが、「江戸時代から灸をすえに行く鎌倉近在の人々により開かれた道である」と古者は語る。（同書一〇八〜九頁） 円海山は横浜市に属す

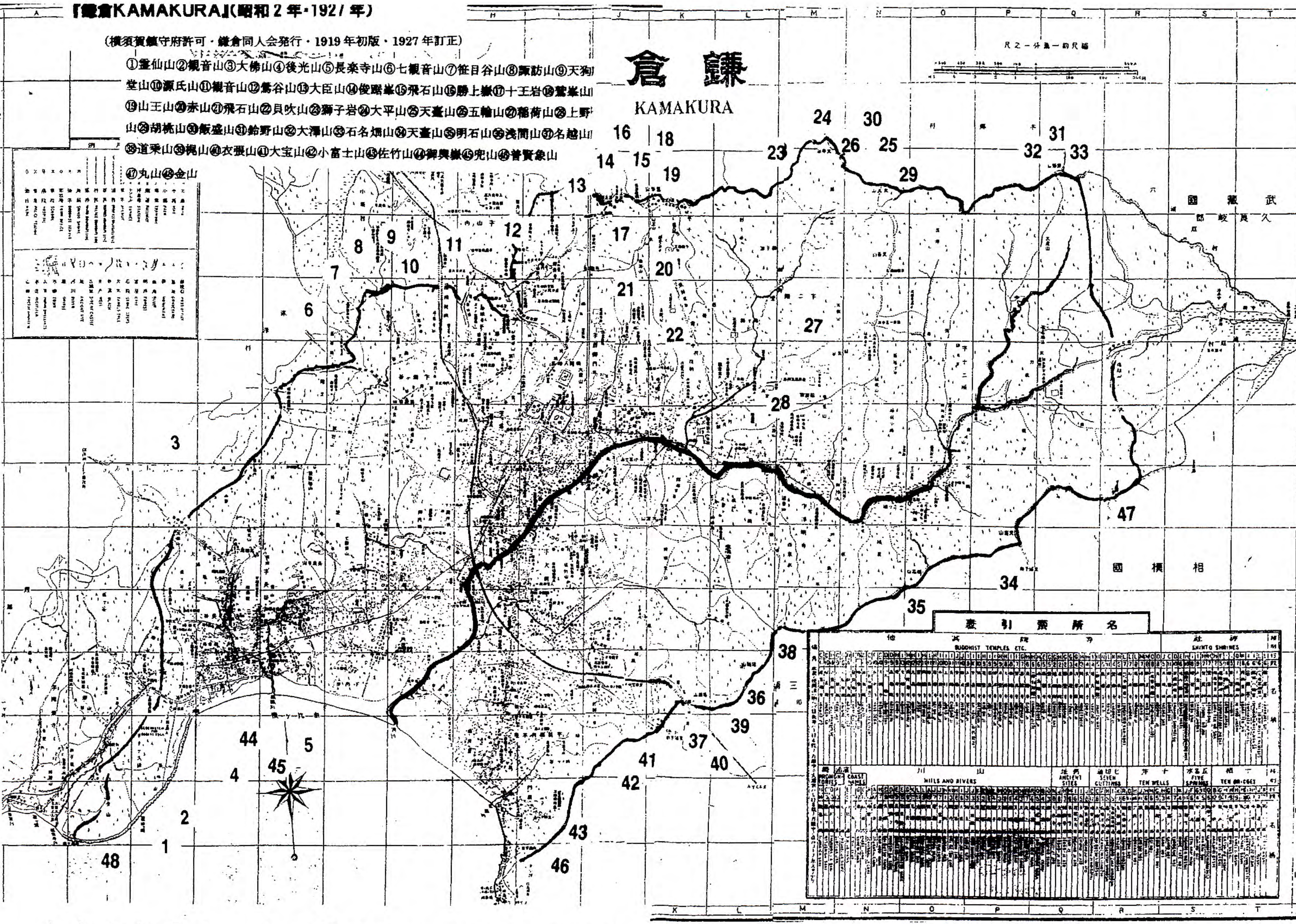
る海拔一五三メートルの山。鎌倉から近いその山中の寺が灸で有名でした。この「鎌倉アルプス越」という言い方は、その二年前、『鎌倉大観』の、一九二八年（昭和三年）発行の改訂版の九十八頁にすでに

相模国鎌倉郡上天部村二千六百八十三番地
編者 犬山初蔵
出版者 香山新之助



(横須賀鎮守府許可・鎌倉同人会発行・1919年初版・1927年訂正)

- ①靈仙山②観音山③大佛山④後光山⑤長楽寺山⑥七観音山⑦笹目谷山⑧諏訪山⑨天狗堂山⑩源氏山⑪観音山⑫鶯谷山⑬大臣山⑭俊賢山⑮飛石山⑯勝上嶽⑰十王岩⑱霊峯山⑲山王山⑳赤山㉑飛石山㉒貝吹山㉓獅子岩㉔大平山㉕天臺山㉖五輪山㉗稲荷山㉘上野山㉙胡桃山㉚飯盛山㉛鈴野山㉜大澤山㉝石名畑山㉞天臺山㉟明石山㊱浅間山㊲名越山㊳道乗山㊴梶山㊵衣張山㊶大宝山㊷小富士山㊸佐竹山㊹御興嶽㊺兜山㊻普賢象山
- ㊼丸山㊽金山



現していました。

「建長寺の坐禅窟から」二三町にして頂上に登れば半僧坊奥の院があり、更に北方の眺望が開けて来る。これから峰を傳(つたわ)って横濱方面に出られる。吾人は之(これ)を鎌倉アルプスの縦走といふ」

十七、二十五、三十七、四十九と、年を経るごとに、鎌倉地図の、滑川の分水嶺とその内部の山の数が増えていったことに驚かされます。鎌倉案内書の筆者や地図の作成者が好き勝手にふやしたわけがなく、歴史と地理の関係を語るうちに情報量が増えたためです。これほどの山々を分水嶺と支脈にもつ地域が他にあるでしょうか？ その上、「鎌倉アルプス」の意外に早い出現！

今でこそ「長瀬アルプス・多摩アルプス・武蔵アルプス・三浦アルプス」などの呼び名がハイキングのためのガイドブックに見かけられますが、それらのどれにも先んじて「鎌倉アルプス」が鎌倉の分水嶺の中心部の呼び名となっていました。私は一九五〇年代後半の学生時代にしばしば鎌倉の裏山を歩きました。それを私は登山ブームにあやかった鎌倉市役所の思いつきにすぎないと思っていました。しかし、それは私の大きな誤解でした。

「鎌倉アルプス」の名を誰が思いついたのか、まだ謎のままです。少なくとも、日本全国に見られる「アルプス」のうちでもっとも古いもののうちに属することは、疑いようがありません。

私は今、みなさんに鎌倉アルプスに行け、という気はありません。かつて鎌倉アルプス最高の休息地点として賑わった場所の北側に住宅地が造営され、次にゴルフ場が作られたかと思ったら、その東側に横浜市の墓地ができました。鎌倉市の奥、滑川の水源地帯にはさらに大規模な墓地が造営されました。鎌倉

アルプスは尾根筋を残すばかりです。

それでも鎌倉の分水嶺である山々はかろうじて残ってくれています。ただし、南側の逗子市との境に巨大な団地が作られた結果、古い鎌倉地図に名前を載せていた山が二つ、完全に消えました。

深田久弥と鎌倉アルプス

一九三二年(昭和七年)九月、深田久弥が鎌倉に引越したのは、カリエスを病んでいた妻(北島八穂)の健康を気遣ったためでした。文芸春秋の社員が見つけてくれた二階家に引越してきました。その家は鎌倉宮に近いところにあつたのですが、一九三四年(昭和九年)、家の脇に鎌倉青年団によって「鎌倉アルプス登山口」の標柱が建てられたのに驚きました。

「鎌倉アルプスなんて名は大げさだけれど、散歩には気持ちのいい丘陵地であつた。天園という山は僕の家からも近いので屢々(しばしば)出かけて行ったが、左手に東京湾をへだてて房総半島を、右手には相模湾の向うに伊豆半島を、手にとるようにはつきりと望めた」(『初秋の鎌倉』一九三四年)

その後、整備されていくうちに、半僧坊から瑞泉寺に至るコース、源氏山から浄智寺に至るコース、十二所神社から六国見(りっこくけん)に至るコースの三つが組み合わされて「鎌倉アルプス」の整備が進み、一九三七年(昭和十二年)、朝日新聞主催の「新神奈川観光線ルート」に「鎌倉北部分水嶺コース」が入選しました。

◆同じ年の七月下旬、鎌倉ペンクラブが「鎌倉アルプス試歩会」を企画しました。でも、鎌倉駅前の集合場所に、歩く気で集まった鎌倉文士は、永井龍男と川端康成と大島得郎の三人だけで、それに大佛次郎が見送りに来ただけだったそうです。馬車で建長寺まで行って、半僧坊か

ら天園に行き、そこから横浜市の杉田に出て南
京町（なんきんまち 現在の中華街）に向かっ
たとのこと。す。〔清田昌弘『かまくら今昔抄
』話 第二集〕冬花社、二〇〇九年七頁以下）
深田久弥は、一九三六年（昭和十一年）二
月初め、鎌倉に三〇センチを超える積雪があ
った時、スキーをかついで天園に登って、建
長寺までツアーを試みました。（小池時一『聞
き書き・茶房りんどうの想い出』一九八三年）
鎌倉アルプスでのスキー滑走は、深田久弥に
とって最も低い標高におけるスキー・ツアー
記録でした。

誰が山を必要としたか

鎌倉の多くの山の中に「天台山」がありま
した。京都の比叡山の別名である「天台山」
が鎌倉の山につけられたのは、京都にあやか
ろうとしたせいだ、と地元の歴史を研究する
人たちが言います。鎌倉幕府の中心地から見
て東北の方角にあり、京都における比叡山の
位置に符合します。でも、それは歴史好きの
人たちの過剰な解釈であって、「天台」とは「山
頂が（台のように）平たい山」のことであっ
て、鎌倉の地図の一つに南側の分水嶺の一つ
に同じ名がつけられていたことがそれを証明
します。

低い場所に「小富士山」がありました。日
本の風景の縮図として、シルエットが富士山
に似て見えなくもない低い山がそう呼ばれま
した。「屏風山」は屏風を立てたように見える
ところからついた名でした。「布張山」は、源
頼朝が夏の日にこの山に白い衣を張って雪景
色に見立てて涼しい気分になったと言ひ伝え
られますが、真偽のほどは不明です。いちい
ち説明していきらきりありません。

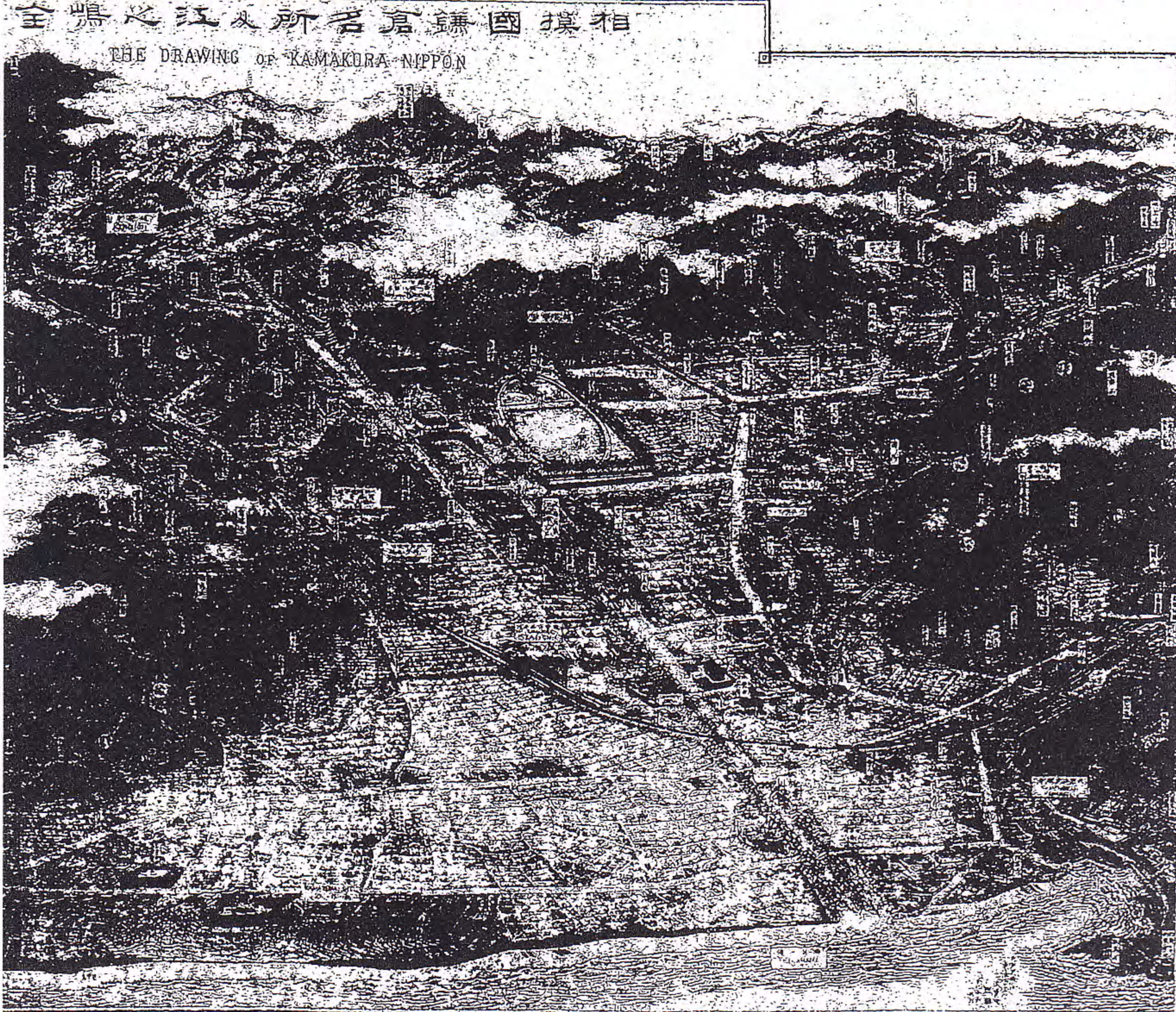
貴族的な雰囲気を持たせたい京都から政
権を奪って鎌倉に幕府を開いた源頼朝を始め
とする東国の武士たちが、分水嶺を城郭代わ

りにして、狭いながらも首都を築きました。
その狭さの感覚から精神的な解放感を得るた
めの一つの方法として、城のような分水嶺の、
ちよつとした出っ張りの一つ一つに名前をつ
けたと推理することができます。その一方で、
人里に近い場所の一つ一つについた山の名は、
居住地と田畑を縫って作られた道を歩く人た
ちにとっての目印、つまり住人たちにとって
のランドマークとしてであったと思われま
す。尾根筋のいちばん人里に近いところにある丘

のような場所に山の名がつけられていたこ
ろにご注目ください。
狭い空間に生活する人たちにとって、多く
の山をもつことは、狭さから精神的に開放さ
れるための心理的な手段であったとも思われ
ます。この点は、なぜ人は山に名前をつけた
のか、という一般的な問題として検討してみ
る価値がありそうです。
とにかく、高い山たちが数多く並ぶ場所に
ではなくて、意外や意外、東京と横浜から近



最近の国土地理院発行地形図での鎌倉の山と川



分水嶺の上と内側に数多くもつ川はどこにあるのか



い観光名所の土地に、山岳密集地域が存在したという事実を、印刷されて売り買ひされた出版物を証拠として、ご報告して、私といっしよに驚いてください。

鎌倉の狭い土地に閉じ込められた状態に暮らす人々が自分たちの世界を広いもの、高いものとして感じようとしたことの反映であったでしょうし、高い人工物の城壁を築く手間を省いて、周囲の山々を防御の柵とした鎌倉幕府の武家貴族の風流心のあらわれでもあったのでしようが、理由はどうあろうと、鎌倉は山の多さを地図という文献資料において示してくれました。

上高地に行つて鎌倉の大きさを実感する

同じ縮尺の、国土地理院発行の地形図を使って、鎌倉の核心部の広さ（狭さ）を測ってみます。プリントの右側に上下に並ぶ奇妙な地図をご覧ください。

滑川が太平洋（相模湾）に注ぐ河口地点を河童橋に合わせます。滑川の川筋を梓川および横尾に至る登山道に近づけます。登山道と言つても、横尾までは都会人たちが散歩気分です。河童橋から徳沢まで、ゆつくり歩いて二時間半ほどです。徳沢の先、新村橋の吊り橋に至るより前に、古都鎌倉を縦断したに等しい距離を歩いたことになりまふ。

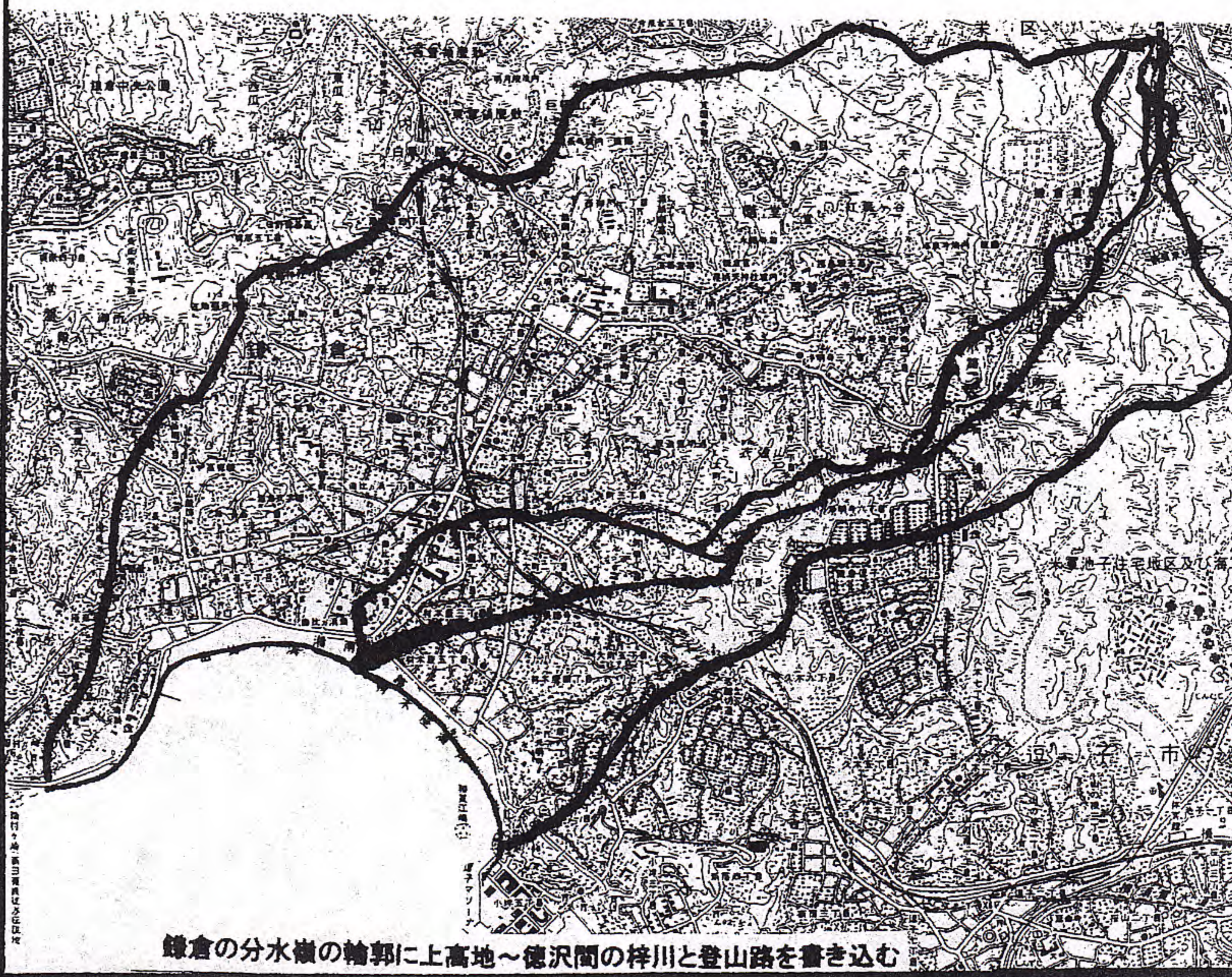
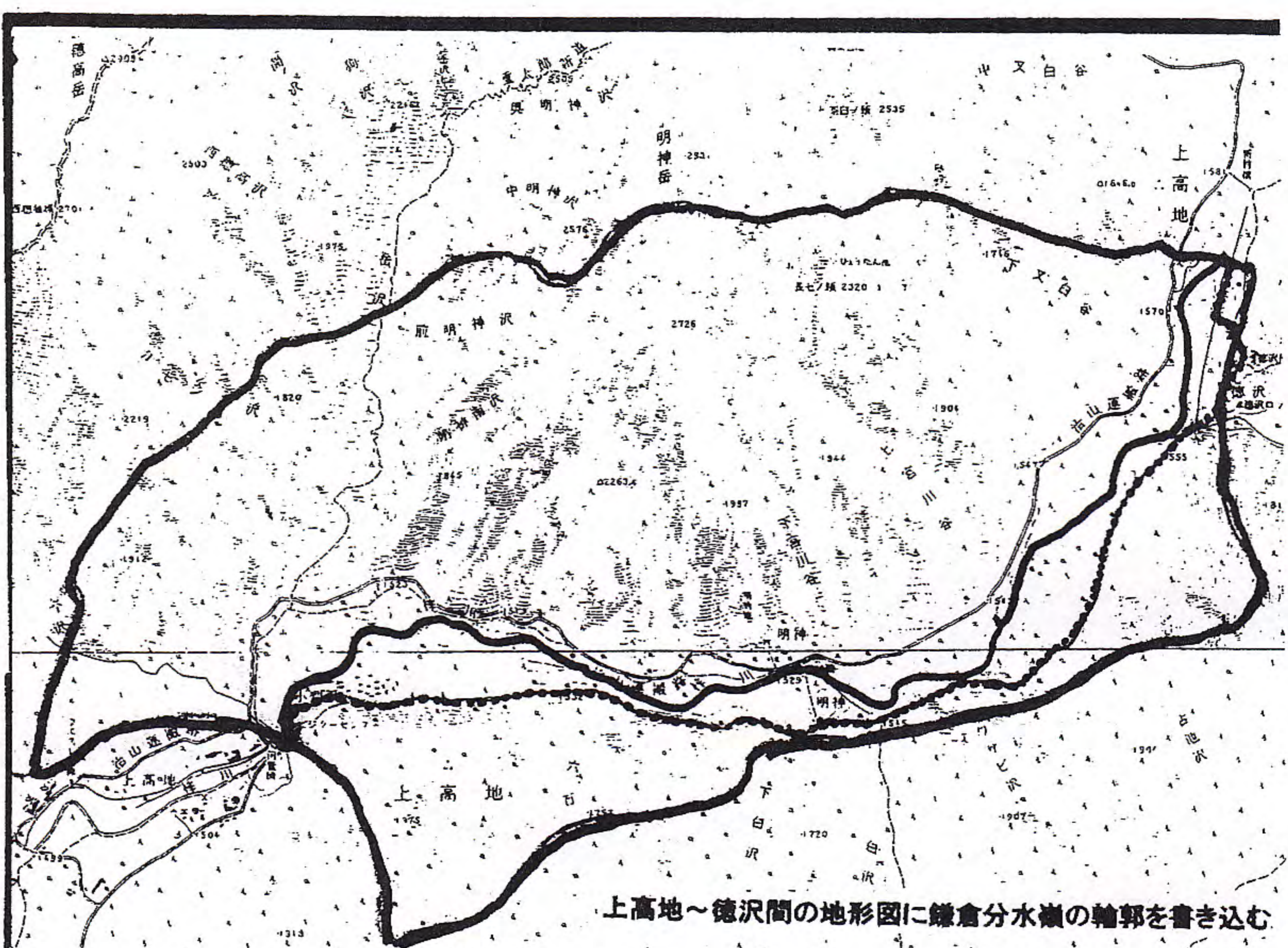
上高地と鎌倉の地図を重ね合わせてみれば、あれほど多くの山の名を持った鎌倉の範囲内に、穂高岳と明神岳に属する峰のたった一つも入りません。上高地から徳沢に至る道筋を見下ろす前穂高岳は、たった一五九メートルの高さでしかない鎌倉アルプスの最高峰である太平山を「山」と呼ばせる気にならないでしょう。

でも、前穂高岳とその南にそびえる明神岳も、新しい時代に上から目線の地形図が作ら

れる過程で生まれたり公認されたりするようになった新しい山たちであつて、鎌倉の山たちより若いのです。

だが、地形図を作る官公立機関が（今では国土地理院が）日本全土の地図を統一基準で整備する過程において数多くの山の名前を生み出した一方で、一定の基準にしたがつて山の名前が取捨選択した結果、かつて鎌倉地図に見られた数多くの山たちの名が消されてしまいました。最新の国土地理院の地形図を見れば、△点のついた天台山（一四一・三メートル）の他に太平山（一五九メートル）、衣張山（二二〇メートル）、源氏山（九三メートル）の四つが残るのみです。鎌倉を包む分水嶺上の山々、その内部の山々は、すべて消え失せてしまいました。自然に消えたのではなく、地図を作製する側が設けた全国的な基準によって淘汰されたと思われまふ。これと同じこ

とが他の土地でも起こっていたに違いありません。



せん。下からの視線による山々が、上からの視線による地形図によって駆逐された結果、人々は生活の次元から見る山々とのつながりを絶たれたのです。地形図によって全国規模で「里山（さとやま）」が消された、と言い変えることができます。

◆人と自然の風景との関係を雄弁に語ってくれていた江戸時代の地図から無機能的で官僚的な基準による地形図が整備される過程において、多くのものを得られた反面で、何かが失われた、と私は思います。そうとも知らずに日本山岳会の会員たちが、年次晩餐会の翌日の懇親山行と称して、山の歴史への思いをまったく持たずに無邪気に「鎌倉アルプス」を歩いたのは、ごく最近のことであります。この懇親山行を企画運営した集會委員の人にはたずねてみたら、「近くて行きやすいから」という以外の動機はなくて、鎌倉の山の歴史への関心はまったくなくのこと

でした。その程度の日本山岳会の会員であること

とに私は恥ずかしさをさえ感じました。その私の気持ちを緑爽会の会員である方々に理解していただけるでしょうか？

「鎌倉アルプス」について

もう一度「鎌倉アルプス」にこだわってみます。

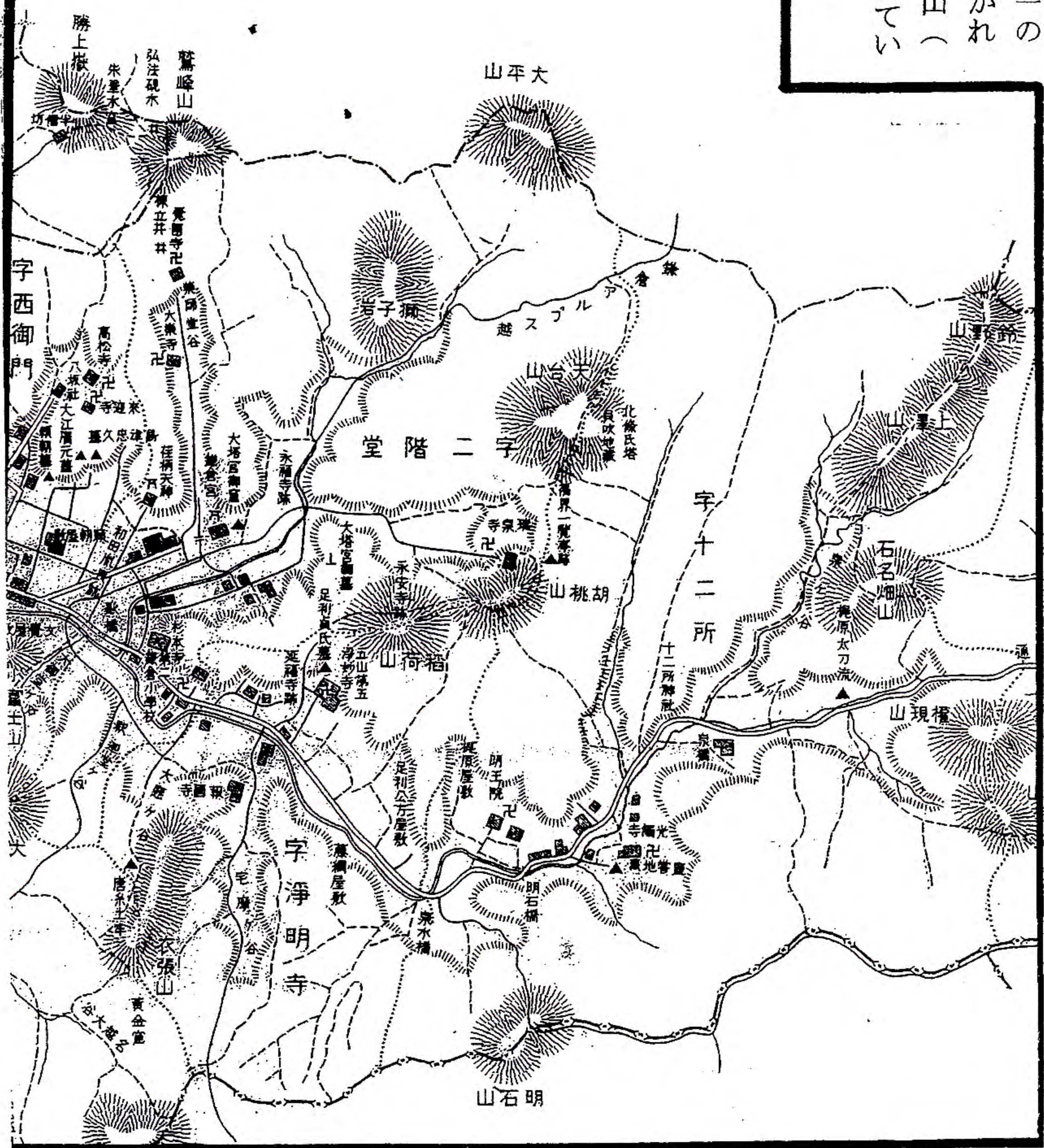
私の目にふれたかぎりでは、佐藤善次郎著『鎌倉大観』（横浜・弘集館発行、一九〇二年「明治三十五年初刊」）の、一九二八年（昭和三年）の改訂版の九十八頁、勝上嶽（しようじょうけん）の項目での、次の言及がもっとも古いものです。

「（建長寺の坐禅窟から）二三町にして頂上に登れば半僧坊奥の院があり、更に北方の眺望が開けて来る。これから峰を傳つて横浜方面に出られる。吾人は之を鎌倉アルプスの縦走といふ」

横浜市に属する金沢八景または金沢文車と

鎌倉アルプス

最初は建長寺の背後にある半僧坊から大平山を経て瑞泉寺に至るコースと十二所神社から六国峠に至るコースの呼び名でした。関東大震災（1923年）の後に復興した鎌倉町が「海の銀座」として海水浴客を誘うのと同時にハイキングコースの開発に力を入れ、1937年（昭和12年）に「鎌倉ハイキングコース開き」をおこないました。鎌倉町が公認するよりも前に「鎌倉アルプス」の愛称が使われていたことを証明するのが、鎌倉の史跡と名称を詳しく語る『鎌倉大観』（1902年〔明治35年〕初版）の1928年（昭和3年）の版の付図に見られる「鎌倉アルプス越え」の文字です。



半僧坊を結ぶ稜線は、かつてハイキングコースとして賑わっていたものの、前に言いましたように、住宅地とゴルフコースと大規模な墓地が鎌倉アルプスをはさむように造営されて、かつての縦走の楽しみを味わえません。現在の鎌倉アルプスは太平山で南に折れ曲がり、瑞泉寺の裏に出る、「縦走」と呼ぶにはいささか寂しい規模のコースとなってしまうています。

とにかく、「鎌倉アルプス」は意外な古さをもっています。

この鎌倉のアルプス縦走路にあった山々を含めて、多くの山の名が国土地理院の地形図から消されました。今日の地形図に山として認知されている四つの位置関係に注意してみましよう。鎌倉アルプスの最高地点である大平山、なぜ選ばれたか理由が不明ですが市街地に近い衣張山、鎌倉幕府の歴史を思わせる源氏山。これらは一応均等の距離をもって三角形を描きます。残る一つの天台山は大平山のすぐ南にあります。この山が特別な意味を

もつのは三角点が置かれているからです。地図を作る側の勝手な都合ということができないでしょうか？

今、私はみなさんに「だから鎌倉アルプスに登りに行きましょう」と呼びかけるつもりはありません。せつかく行ってみようと思いの方がおいであるのなら、地図から消えた山たちをしのぶために、そしてかつて鎌倉に住んだ人たちが何を山と呼んだのかを理解することを目的となさってください。人と山の関係について深く考える機会になりうるからです。

東京でも同じことが起こっていた

私は東京都港区元麻布で生まれました。いえ、私の生まれた時、その場所は東京市麻布区でした。六本木、一端、広尾などに取り巻かれる麻布の高台は「麻布山（あざぶさん）」と呼ばれていました。

JR中央線の東京駅と吉祥寺駅の名前を並べてみます。神田・御茶ノ水・水道橋・飯田橋・市ヶ谷・四谷・信濃町・千駄ヶ谷・代々木・新宿・大久保・東中野・中野・高円寺・阿佐ヶ谷・荻窪・西荻窪。それらの駅の最後の文字を並べてみます。田・水・橋・橋・谷・谷・町・木・宿・久保（二窪）・野・野・寺・谷・窪窪。谷間の川沿いに鉄道が敷かれたこと、その両側が、低かろうとも台地状の丘と山であることを思わせます。

住宅地と交通路が谷間から小高い所へと広がるうちに、都市の住人たちは山を失いました。それにつれて山と丘の名が東京から急速に消えていきました。かろうじて残っているものの一つが青山です。「青」は『万葉集』の昔から「緑」を意味しましたから、青山とは

「緑の山」でした。青山学院から青山一丁目あたりまで、明治時代まで豊かな緑の土地であったと言われます。

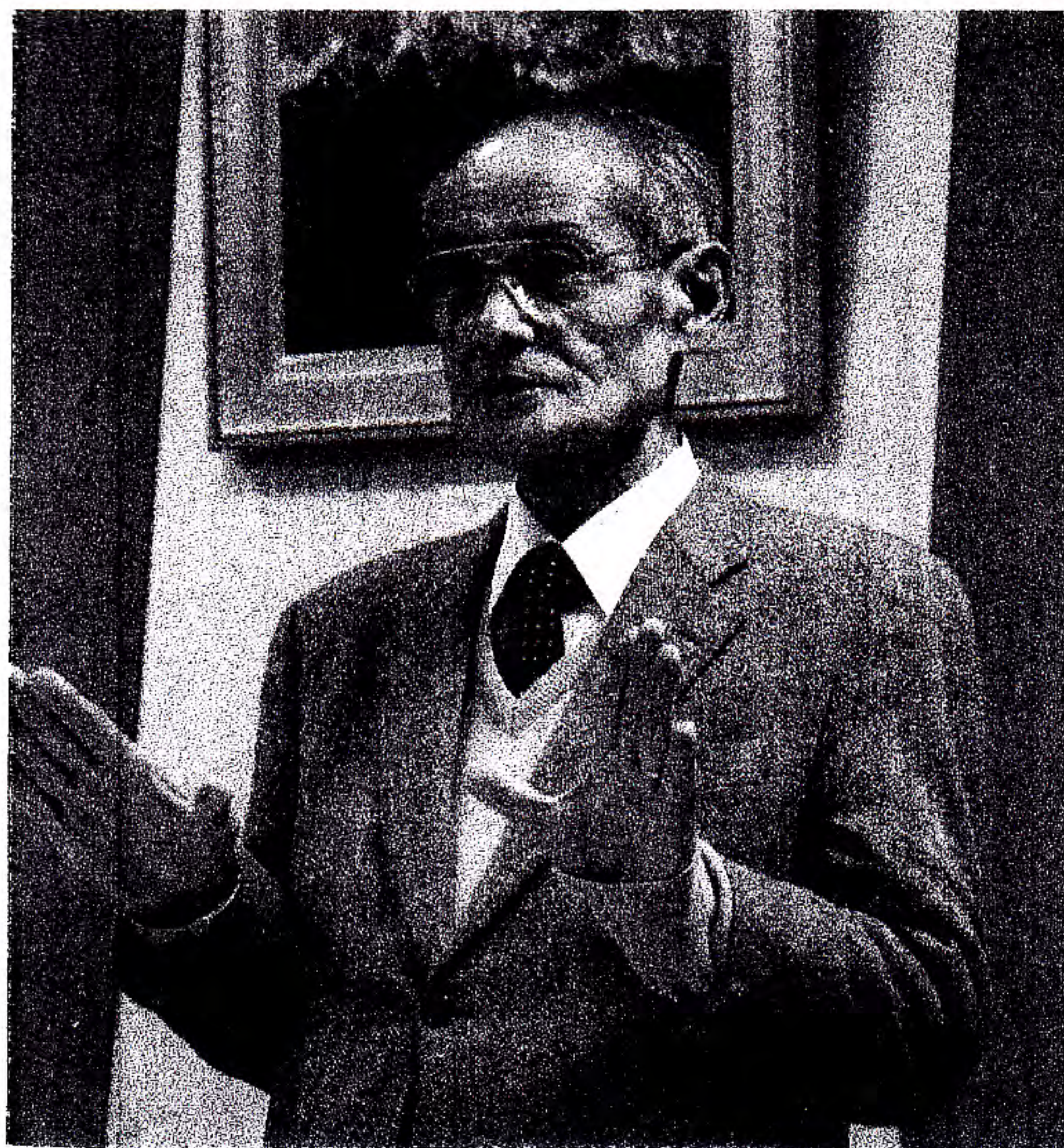
現代に残る駅名や地名を手懸りにして、今は見えなくなってしまうた東京の自然の地形を思い起こしていただきたいと思ひます。

その上で、私たちの活動エリアである山岳地帯に目を向ければ、地図作成のために多くの山の名が生まれた一方で、人里に近い山たちの名が駆逐されてきたことについてお考えください。

私が、日本地図から、利害関係者の力関係が生んだ都道府県とその境目を取り払って、河川流域と分水嶺だけの地図を描いてみる気になったのも、鎌倉の山たちの運命に関心を抱いたのも、同じ気持ちから出たことでした。

国家的な規模による地形図が多くの新しい山と峰を生む一方で、人里に近い数多くの山の名を駆逐してきたのではなにか、という疑問を私はめぐることができません。官僚的な情報操作の胡散（うさん）臭さを私に感じ取らせませう。そして、鎌倉の山々も例外ではありえずに、地図から名を消されました。

一八九四年（明治二十七年）から一八九五年（明治二十八年）にかけての時期に、それまで日本でいちばん人口の多かった新潟県を第二位に落としたのが東京市でした。稲作主体の農業国家だった日本が工業中心の都市型国家に変わりつつあることを象徴します。ちょうどその頃に志賀重昂（しがしげたか）の『日本風景



撮影・小泉義彦

論』が出版され、小島烏水（こじまうすい）がその本から大きな影響を受けて槍ヶ岳に登りました。それが日本山岳会の結成の端緒になりました。それが偶然の一致にすぎなかったのでしょうか？

工業化による交通手段の革新と都市生活者の経済的な余裕が、旅行と登山を容易なものとし、ますます多くの人が遠くて高い山々に気をとられるうちに、生活空間の中の身近で低い山々をいづくしむ感情を持ちにくくなったのではないのでしょうか？

地形図に登録された山と峰のすべてが登りつくされて、「いくつ登ったか」という数勘定ばかりが目立つ昨今、自分たちの身近な生活空間において山を感じ、その自然を味わうことのできる人たちが、自然を自分たちの力で守ろう、再生しようという気概を抱くようになったことに私は救いを感じます。緑爽会もそのような機運の中に誕生しました。

しかし、人間が自然を守るのが先か、自然から人間を守るのが先か、という厄介な問題を私たちはつきつけられています。

三月十一日の皮肉

二〇一一年三月十一日に起こった東日本大震災は、『日本百名山』の著者にとっても、不幸な日でした。なぜなら、百名山の踏破に生

き甲斐を感じる人たちが尊敬してやまない深田久弥の誕生日にもあたる日でした。これから先、深田久弥誕生日祝いと称してにぎやかに祝杯をあげる催しを自粛しなくてはなりません。

その深田久弥が他にもない鎌倉の住人でもありましたが、東北大震災を経験したり、その後の成り行きを経験したりしたら、どのような反応を示したのでしょうか？

二〇一一年十二月八日の『朝日新聞』の神奈川版に載った記事を、深田久弥が目にしたとしたら、どう思ったのでしょうか？

神奈川県が東日本大震災級の大地震や津波に襲われた場合を想定して対策を練りはじめたと伝える記事は、一四・四メートル級の津波が鎌倉を襲った場合、三方を山に囲まれた鎌倉市の中心部が壊滅的な打撃を受ける、と伝えました。江戸時代、慶長年間に起こった大津波が一四・四メートルの高さだったことにちなむ数字です。古都の景観を守るために一五メートル以上の高さの建築物を作らせな

いできた鎌倉市の市民たちは、山が身近にあつて逃げ場を提供してくれることを深く感謝することでしょう。

山が先か、海が先か？ どちらを優先して考えるべきなのか？ 山の自然の美しさを愛（め）でるといふ審美的な感覚だけで自然保護を考えるわけにいかないという問題がつきつけられています。自然から人間を守るといふ、逆方向の考え方を加える必要があります。

深田久弥は、百名山の選抜にあたって、山の姿かたちという、「下から視線」を大事にした人でしたから、私たちの議論に加わってくれたことでしょう。

「里山」を見直すことの意義

私の話はこの中で終わってもよいのですが、大震災と大津波におびえるところで締めくくる

のであつては悲しすぎます。

自然の災害におびえて暮らすよりは、時たまに暴力をふるう自然を受け入れながら、できるかぎり自然と仲良くして暮らすのが賢明な生き方です。緑爽会の人たちは、そういうことをよくわかまえる人たちの集団です。自然と人間のあいだのバランスがよくとれた生き方を考えつつ実践する緑爽会に一冊の本を推薦しておきます。

『里山創生』という題の本は、私が二度目の入院生活から自宅に戻った直後、松本君から「来年二月の緑爽会の話をお願いします」と電話のかかってきた日の前日に発売されました。「神奈川・横浜の挑戦」という副題をもつその本は、大都市圏の生態系の好ましくない変化をくい

とめるために里山の復活と創生に取り組む人たちの努力について報告することを内容としています。丹沢のシカによるブナ植生の破壊的な状況、相模川流域での外来種生物の進出などの現状と、それをくいとめるための対策と努力における多くの人々の協力が報告される中で、鎌倉の土地利用と緑地保全についても語られています（砂土原聡氏他編、創森社刊）。身近な山である「里山」を主要なテーマとするこの本は、高尾山などで森林復活の実践をおこなってきた人々の行動と重なる部分をたくさん含んでいます。

自然災害におびえる受身の状態であるよりも、身近な山々で自然をいづくしむ能動的な実践に多年の登山経験を生かすこと。そこそが山岳会らしい、希望に満ちた行動です。緑爽会の今後のご活動に期待する言葉によって私は今日の話をしめくくりまします。

これで終わります。長時間、耳を傾けてくださってありがとうございます。一部分だけでしたが、遺言を語る事ができて私はうれしく思っています。

（二月十五日作稿終了）

ロペールさんのスピーチ 後記にかえて

親日家のロペール・ヴィニョ氏が来日された。彼は日仏学院の副学長として日本に滞在した頃、偶然立ち寄った神楽坂の小料理店でその主人と意気投合した。二人はどちらも子どもの頃に戦争を体験していた。神楽坂の内藤靖治さんは幼いころに旧満州から命がけで帰国してきた人。ロペールさんもナチの占領下で育ったから、片言の日本語ながら思いを共有することができた。

内藤さんは東大の食堂で働きながら独立して店を持った。だからその店にぐるお客は大学の先生やジャーナリストが多かった。私も新聞記者の友人に連れられて、その店の暖簾をくぐったのが最初だった。もう三十年以上も前の話である。常連の山好きで「つくし山楽会」ができてロペールさんも参加した。山頂で、みんなと同じにお握りをほおぼり、沢庵をかじる外人を周囲の人は奇異の目で見たが、彼は少しも気にしなかった。詩人であり、画家であり、役者としても玄人はだしの彼からフランスの文化の奥深さを学ばせてもらった気がする。

彼が「私のフルサト」と呼ぶ日本は、まさに春たけなわ。去年は震災でストンプがかかってこられなかったというが、体を悪くして店を閉めたヤスハルに会いたくってきたことは誰もが知っている。歓迎会での彼の挨拶が感動的だった。

「フクシマは、大震災や津波の被害を想起させるだけでなく、いまやヨーロッパでは反核のひとつの象徴となつていっています。すでに唯一の被爆国だった日本は、戦争における核兵器の恐ろしさを象徴する存在でした。そして今回、フクシマは平和な時代における核の脅威を象徴する、新たな存在となったのです。東北大震災に始まる一連の惨事は、われわれ世界全体に、未来への教訓と知恵を与えています」（野澤文二訳）

そうなんだ、と外国人から言われて気がついた。それなのに日本では、政府も企業も原発への未練が捨てきれないでいるらしい。（近藤緑）